

環

(あい)

光聖抄	2
琥珀集	6
珊瑚集	15
瑪瑙集	27
紅玉集	29
7月号月評	30
忠贈句集拝見 (48)	32
忠贈俳誌拝見 (18)	34
特別作品「オーロラに会ふ(一)」	36
琥珀集作品鑑賞	38
珊瑚集作品鑑賞 I	39
II	40
瑪瑙集紅玉集作品鑑賞	41
俳誌交款	43
他誌転載	44
ひこばえ会通信 (17)	47
戦の国父の蒼天 (40)	48
徳島一泊吟行 (II)	50
エッセイ「時の流れ」	52

今月の一句

木曾ひとの乗車短し青くるみ

桂樟蹊子

(昭和三十四年作)

今は車を利用しての木曾人の暮らしであるが、当時ほとんどは、
わずか一・二駅を乗降する人が多かったようである。その人達は畑
のもの、山のをふんだんに入れた負い籠を背負ったり、中には
山刀を持った人達であったようである。乗車客のそれぞれが、木曾
路の人々の生活を匂わせていた光景が沸々と蘇って来る作品であ
る。

隆子

百濟寺

塩路隆子

筒鳥の声山門に入りてより
万緑の要に寂し百濟寺
磴ごとに深まる靈氣小瑠璃鳴き
幾万の生いのち命涼しく寺領かな
厨子内の秘仏や如何に新樹光
坊跡のなごり石積苔の花
望郷の真紅しやくなげ百濟びと

七月号光耀抄

塩路 隆子選

包丁は関の逸品桜鯛
留袖の出番待つ日々風入れる
何処より蒲公英の絮大河行く
更衣捨てられませぬ親の愛
夏立つや「わだばゴッホ」の志功の碑
薫風の佐渡国中や朱鷺の舞
昼夜なき恋猫に庭貸してをり
画廊路をシツクに樟の春落葉
齒触りは木綿がよろし冷奴
大原女に扮してその気河鹿磴
本尊の開かずの厨子や夏に入り
御座の間に千の老松緑立つ
藤棚を天蓋としてポルシェかな
姿見の我に気合を夏来る
初鮒を盥に入れてひいふうみい
母の日も母の采配厨ごと
老医師の今も自転車蛙鳴く

北尾 章郎
竹内 悦子
坂根 宏子
森下 康子
田下 宮子
坂上 香菜
辻 香秀
小澤 菜美
塩路 五郎
鈴木 照子
笠井 清佑
川崎 利子
和田 郁子
和田 森早苗
増田 一代
宮崎 左智子
藤見 佳楠子

青芝は栗鼠のオブジェを包みけり
 菟敷き大道将棋花の下
 ハイジ村の百花繚乱春の丘
 初夏や男盛りのクールビズ
 単線のサイクル列車若葉風
 職退きて踏み出す一步聖五月
 跡継ぎの男の子を持たず柏餅
 ハーブテイ自分に淹れる薔薇の昼
 島の夏犬が動けば鈴が鳴る
 雨上り青嶺にはかにせり出しぬ
 桜餅本家総家と軒並べ
 亡き祖母の花嫁のれんうららなり
 禰宜の説く三種の神器風眩し
 糸ざくらの覆ふ十六羅漢かな
 連獅子の毛ぶり豪快春歌舞伎
 新茶汲む茶請は阿波の和三盆
 龍鳴けば遠き雷鳴大徳寺
 そばかすの憂鬱クロバーの上
 シヤガールと風を舞ふなり春の夢
 しなやかな気韻を残しリラの風

宮田 香
 難波 篤直
 土井久美子
 中村ふく子
 池田加寿子
 石川かおり
 伊東 和子
 伊藤 純子
 岡 佳代子
 中本 吉信
 国包 澄子
 小西 和子
 山口キミコ
 五十嵐 勉
 田中 浅子
 松岡 和子
 山崎 里美
 常田 創
 飯田美千子
 片岡久美子

俳句かと笑ふ里人落椿

朝風に揺れて満天星花の鈴

禅庭の漢しづかに垣手入

母の日に夫よりピアス贈らるる

「浮舟」のけふはここまで月隴

春深し戦艦大和生みし街

朝散歩いつもの雉子の待ちてをり

覗きみる念怒の閻魔花の冷え

風光る大湖の景をひとり占め

法灯の鳳凰眩し若葉どき

玻璃越に物言ひたげな春の猫

やはらかきシャンソン音色春の雨

若草の芳し風に伴走し

捨て舟の湖畔に吹かれ柳かな

莢ごとに五つ並びてはじけ豆

ハンゲル語解けて楽しき春の旅

王朝の雅の品に緑さし

オオイヌノフグリと言へり三歳児

一村の目覚め一気や田水張り

再訪を串焼鮎にもてなされ

笹井 康夫

杉本 綾

佐用 圭子

西郷 慶子

粟倉 昌子

井口 淳子

谷口 俊郎

長濱 順子

前川 ユキ子

秦 和子

福本 すみ子

藤本 秀機

中井 登喜子

中川 すみ子

新實 貞子

西岡 裕子

西垣 順子

西村 敏子

能勢 栄子

田中 芳夫

夫の忌や墓を離れぬ青蛙
 平和世の公家の狩衣賀茂祭
 夕暮れて木造駅舎花明り
 銭湯の煙真直ぐに夏来たる
 瀧のごと羽根のごとくに桜満ち
 春雪にひそと息づく白川郷
 菖蒲湯を立てて鉢巻しめてみる
 杉玉の暖簾をくぐるメーデー歌
 いちはつの咲きたるみ寺尼の声
 花季の露天湯殊に賑はへり
 朱鷺の声貫く島や夏兆し
 名刹の浄土涅槃図古構図
 真白なる嬰の靴まぶし夏来たる
 小魚の唐揚げ添へて豆ごはん
 嫁ぐ子へ点茶一服炉を仕舞ふ
 仔猫来て問はず語りに亡夫のこと
 花の下円坐をんなの囁し
 産院の名に聖の字や桜の実
 参観の日の母さがす麦の笛
 肩に手を触れる思ひや藤の房
 被災地の孤児励まして鯉のぼり

辻 知代子
 高谷 栄一
 桂 敦子
 紀川 和子
 木戸 宏子
 小林 久子
 伊藤 和子
 伊藤 憲子
 稲田 和子
 伊庭 玲子
 大越 義雄
 大島 みよし
 大松 一枝
 渡部 法子
 山口 和子
 山田 愛子
 山本 孝夫
 吉田 希望
 松田 洋子
 松田 和子
 三原 利枝

琥珀集

五月鯉

竹内 悦子

開ききる牡丹のいのち豪華なり

県庁の古き館の八重桜

留袖の出番待つ日々風入れる

祝宴をひかへ蛙の目借時

武者人形寂しがり屋の子に飾る

近江路の茅花流しや好つきやねん

マンションにおよぐは小振り五月鯉

桜 鯛

北尾 章郎

「高砂や」音吐朗々春の宴

祝宴へぬつと春月婚の庭

庭に舞ふ初蝶ほうと言はせけり

潮騒を掬はむばかり春北斗

包丁は関の逸品桜鯛

隣家に招ばるる庭の花盛り

どつと夏あれやこれやの服飾り

柿若葉

坂根 宏子

大岩に姿見せ得ぬ龍の滝

緑立つ海住山寺鎮もれる

静謐のままに五重の塔五月（海住山寺）

俯瞰する木津川ゆるり春惜しむ

恭仁京址守る里山柿若葉

蒲公英や木造校舎懐しき

何処より蒲公英の絮大河行く

親の愛

森下 康子

張尻の合はぬ話や新茶汲む

失せ物の頓に増えけり春の鵲

マンシヨンに表札はなし若葉風

来世には人魚となりて初夏の波

「おおなみ・こなみ」くるりと廻りポピー咲く

更衣捨てられませぬ親の愛

潔癖性は母譲りなり花水木

津軽の春

田下 宮子

人に酔ひ人に疲るる花の城

花の下津軽じよんがら響きけり

薄紙を開けば白き胡蝶蘭

逍遙す古木の多き花の城

天守へと渡る朱の橋花筏

夏立つや「わだばゴッホ」の志功の碑

天草は伴天連の島聖五月

佐渡島

坂上 香菜

拉致浜の残る越後や若葉寒

島へ来てまづ朱鷺の町遅桜

薫風の佐渡国中や朱鷺の舞

繁殖の朱鷺の黒すみ桜散る（朱鷺の森公園）

そこここに新潟県花チューリップ

おけさ節流人の島の花蘇枋

国中に「佐渡飛鳥の碑」田植どき

（亀井勝一郎が大和に似ていると云ふ）

二軒茶屋

辻 香秀

花びらのゆれるがさまに春日傘

味噌味の木の芽田楽二軒茶屋

五月晴ハートの絵馬に「恋求む」

寄り添うて空に飛び立つ恋の鳥

昼夜なき恋猫に庭貸してをり

大釜に茹でる筍香満つ

母の日に一言「元氣」息子より

春落葉

山門の剥落かとも飛花落花
難工事と聞く疏水路や桜散り
淡あはの庭木の揺れや春の風邪
春眠をなほ深うせる痛み止
鮎ずし味のアイスクリーム湖畔亭
穴出でし蛇の戸惑ひ新団地
画廊路をシツクに樟の春落葉

小澤 菜美

蜘蛛の囿

藍染の暖簾くぐりて蓬餅
飾り窓にポトルシツプや新樹光
朝毎に庭の蜘蛛の囿被りけり
歯触りは木綿がよろし冷奴
さくらんぼ杏仁豆腐に木目匙
風薫るオランウータン腕組みて
武者人形真似てポーズや異国の子

塩路 五郎

金閣寺

金閣を背に逆光の夏帽子
鳳凰の首夏の金さす抹茶席
天井画の青き極楽夏立ちぬ（三千院）
大原女に扮してその気河鹿磴
韻々の鐘の幻聴夏椿（寂光院）
せんとくんが迎ふる宿や燕の子
万葉の恋歌の文字宿浴衣

鈴木 照子

百濟寺

河骨にもりあおがえる鎮座かな（湖東三山百濟寺六句）
一代に一度の開扉青葉仏
菩提樹の洞の活きづく新樹かな
一身を新樹に埋もれ百濟寺
近江路や田水張られて映す雲
本尊の開かずの厨子や夏に入り
雛罌粟を透かす日差の柔かき

笠井 清佑

緑立つ

川崎 利子

運不運神の召すまま蟻の列

万緑に一願成就朱の鳥居

志すオーブンキャンパス木々芽吹く

御座の間に千の老松緑立つ（和歌山養翠園二句）

鳶啼ける汐入りの庭夏きざす

いかづちや紀州街道分岐点

琴の音に初夏の日差の緩む午後

藤棚

和田 郁子

千の鈴付けし満天星花あかり

外つ国を訪ひたる記憶リラの花

葦若葉すいすい泳ぐ小亀かな

畦道の雨後の燦めき柿若葉

公達の舟遊び池かきつばた

藤棚を天蓋としてポルシエかな

風薫る苑を離れず二羽の鳩

夏来る

和田森早苗

打返す波の気怠き暮の春

姿見の我に気合を夏来る

藤垂れて浮かれ調子のまよひ虻

花虻のまつすぐ飛んで房に消ゆ

蹟きて身の程を知る初夏の旅

ひかへめに浜豌豆の花咲けり

寧らぎの玉露一服薬の日

宮崎さん宅を訪ふ

増田 一代

宮崎さんは話し上手や春日和

「喫茶去」と案内の庭にさくらの実

古民家より巢立ち一斉雀声

初鮎を盥に入れてひいふうみい

母の日のプレゼント買ふ未来母

春めきて日毎に変わる比良の山

窓全開路面電車へ散るさくら

瑠璃集

青嵐

常田 創

青嵐鳥城の空を払ひけり
黒南風や利休好みの昼餉とす
太陽の塔まで遠し陽炎へる
そばかすの憂鬱クローバーの上
午睡から覚めておもむろ米を研ぐ

紅緒下駄

松岡 和子

ループにて登る一輛芽吹山
春祭奴の足の軽やかに
新樹光受刑者作の紅緒下駄
花吹雪みな畏みて宮参り
新茶汲む茶請は阿波の和三盆

春の夢

飯田美千子

シャガールと風を舞ふなり春の夢
大空を仰ぎて咲ける鼓草
むら染めのフラワーカーキルト春の色
細き目の千手観音春深き（法性寺）
巢作りや無断入居の夏燕

鳴き籠

山崎 里美

ボクサーになつたつもりの春のジム
畑を打つ夫の勢ひ狭庭かな
万緑を叡山電車潜り抜け
龍鳴けば遠き雷鳴大徳寺
緑蔭や利休ゆかりの石灯籠

リラの風

片岡久美子

麦青む宙のひかりを撒きしごと
さくら姫在はすごとくに御苑かな
両の掌に包みつめたき八重桜
しなやかな気韻を残しリラの風
七彩の野菜スープや花の冷

七月号月評

塩路 隆子

今月も瑠璃集からの月評をさせていただきます。

龍鳴けば遠き雷鳴大徳寺

山崎 里美

鳴き龍とは、向かい合った壁や天井と床の間で拍手など瞬間的な音を出した時に、多重反響をおこして特有な残響が聞こえる現象を龍の鳴声としたものである。

日光東照宮に代表されるが大徳寺もそのようである。作者はその龍を鳴かせてみたところ、遠くに雷の音がしてきたと言う。まるでその音は龍が地上に降りて来る前触れに感じられたのであろう。その瞬間をうまく捉えられた。

そばかすの憂鬱クローバーの上

常田 創

当年三十歳、男性では瓊の最年少の青年である。そばかすとは、雀斑、雀卵斑または夏日斑とも言い肌の露出部に生じる灰褐色の色素斑である。いまは副腎皮質ホルモンやビタミンCなどで抑えられるが、思春期から顕著

になるので憂鬱になるのである。塾の講師である作者は塾生のそう言った悩みをクローバーの上で聞かされたのであろう。久しく聞かなかった「そばかす」を現代的に捉えた句、懐かしく思った。

俳句かと笑ふ里人落椿

笹井 康夫

「天塚」の木田千女主宰の句に「俳句かと鶴の番人笑ひけり」があるが同じ体験をされた作者の句、面白いと思った。落椿椿を見て句を考えていた作者を見つけた里人が「俳句は出来たんかいな」「そんなにすらすら出来たら苦労しませんわ」「さっきの人もそう言うってたわ。なんでそんな難しいもんするんかいな」と笑われたと言う。「落椿」の季語により、作者は少々の落胆を感じながらも、「しかし辞められないのが俳句ですわ。落ちてもこの落椿の美しいこと、これを句にするのが俳句の妙味言うもんです。あんたもやりませんか」などの会話が聞こえてくる。この連想の膨らみが俳句の面白さと信じている。

禅庭の漢しづかに垣手入

佐用 圭子

我が家は禅宗であり、禅寺の素朴さと質素なたたずまいに大いに惹かれる一人である。その静かな庭を静けさ

に包まれた中で一人の男が垣の手入れをしていると言
う。「漢」と言うから凡そ風貌は青もあり現代の若い男
性が浮かぶ。禅寺の生垣・竹垣・柴垣のいずれかである
かを静かに手入れする人が、まるで作者には仙人のよう
に見えたのかも知れない。立ち止まりその静かな雰囲気
に吸い込まれている作者の姿がみえる。戒律の厳しい中
の、禅の寺なればの作品である。

(以下略)